ISSN 1346-1990

J-STAGE NEWS J-STAGEニュース

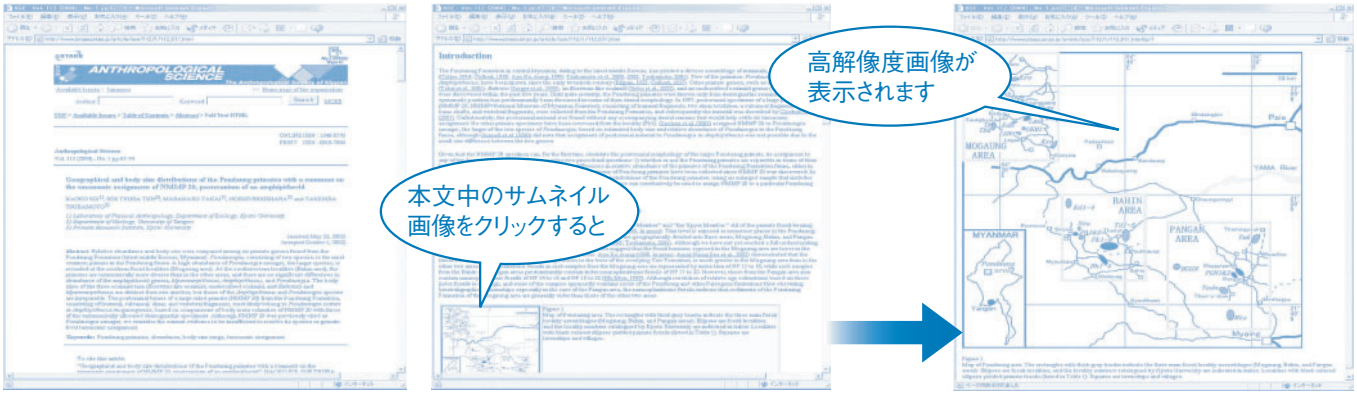
No.10
2004年7月1日発行
科学技術振興機構

新機能紹介　～全文HTML公開・早期公開～

J-STAGE News No.9でご紹介した新しい公開機能を利用したジャーナルをご紹介します。

◆全文HTML公開

J-STAGEでは論文本文の公開はPDFファイルで行っておりますが、ホームページを閲覧する感覚で論文を見られる全文HTML公開への対応は以前よりいくつかの学協会様から要望を頂いておりました。全文HTML公開では本文中の図表への参照番号がハイパーリンクになっており、クリックするとサムネイル画像に移動します。さらにサムネイル画像をクリックすると高解像度の図表が別ウィンドウで表示されます。引用文献番号も全文HTML本文中でハイパーリンクになっており、クリックすると引用文献一覧の当該文献へ移動し、更にリンクボタンを押すとその論文の抄録や原文献へたどり着くことができます。2004年6月現在、全文HTMLは日本人類学会発行の「Anthropological Science」誌、及び日本細胞生物学会発行の「Cell Structure and Function」誌、及び日本遺伝学会発行の「Genes & Genetic Systems」誌にて公開しておりますので是非一度ご覧下さい。



◆早期公開

『論文を投稿してから公開されるまでの期間を短くして欲しい』というのは論文を投稿する著者共通の要望だと思います。その実現のために開発されたのがこの早期公開機能です。冊子体の発行タイミングが少ないジャーナルの場合、採択時に一論文単位で公開できるメリットは大きいかと思います。早期公開機能は2004年6月現在、日本人類学会発行の「Anthropological Science」誌、及び日本薬理学会発行の「Journal of Pharmacological Sciences」誌にて利用され、公開しております。

日本化学会大会でJ-STAGEを出展

2003年3月26日(金)～29日(月)に関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス（大阪府西宮市）において日本化学会第84春季年会が開催され、付設展示会にてJ-STAGEのブース展示を行いました。日本化学会の年会は参加予定者が1万人を超える大規模なものであり、出版社や計測機器メーカー、文献データベースサービスやソフトウェアメーカーなどさまざまな展示が行われていました。今回、JSTでは日本化学会と共通のブースで出展いたしました。日本化学会はBCSJ誌においてJ-STAGEによる電子投稿を開始したことや2005年から予定している電子ジャーナルの有料化についての展示・説明をされ、JSTは日本化学会の電子ジャーナル、電子投稿のプラットフォームとしてJ-STAGEが使われていることや相互リンク機能などを説明しました。

参加者のほとんどが研究者や大学関係者であり、ChemLett誌やBCSJ誌をはじめ、J-STAGEの電子ジャーナルを閲覧した経験があるという方々がたくさんおられました。J-STAGEに対する参加者からの反応は概ねよく、特に電子投稿により投稿から公開までの期間が短くなる点については多くの方々からよい反応をいただきました。また、引用文献から外部サイトへのリンク機能についても便利であるとの反応をいただきました。JSTとしましては、今回のような学会の大会の出展は参加者のほとんどがJ-STAGEの直接の利用者となる方々ですので、展示効果は大きいと思われますので、今後も積極的に参加していきたいと思っております。

J-STAGEから世界へ　～UniBio Pressの目指すものは何か～

UniBio Press・(社)日本動物学会事務局長　永井　裕子

2003年、国立情報学研究所の推進する「国際学術情報流通基盤整備事業」に選定された生物系電子ジャーナル三誌は自主的パッケージを組み、J-STAGE上にUniBio Pressを誕生させた。すなわち日本哺乳類学会、日本哺乳動物卵子学会、(社)日本動物学会の学会誌、Mammal Study、Journal of Mammalian Ova Research、Zoological Scienceである。もとより、国内外図書館向け販売のための、パッケージである。

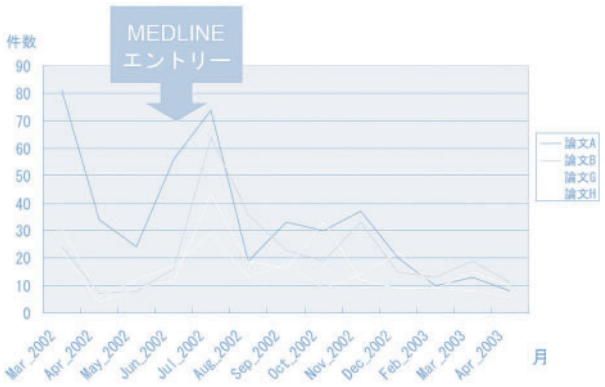
学術情報としての電子ジャーナル

学会誌は、ある学問領域の研究者が、研究発表の場としての、そして研究者相互のある紐帯としての役割を担っている。学術誌の発行は自らの学問分野の進展を図り、また守るためのものである。それはまた国の学問を支えることを意味しており、学術情報を生み出し、学術誌を作りだし、学術情報を研究に用いているのはあらためて言うまでもなく研究者なのである。さて、今日、「学術情報」の媒体は、インターネットの普及により、冊子から電子体へと大きく様変わりをした。電子ジャーナルの特徴はいまさら述べる必要はないだろう。ここでは、電子ジャーナルアクセスログ（利用者の検索・表示・ダウンロード等の記録）の重要性について申し述べたい。図は千葉大学　竹内比呂也助教授、土屋俊教授、尾城孝一課長（千葉大図書館）の解析による、動物学会会誌Zoological Science（以後ZS）に掲載された論文のアクセス状況を示したものである。解析は、J-STAGEから毎月、学会あてに送信されるアクセスログデータを基に行われた。

J-STAGEでは2001年秋から、生物系ではその最大の二次情報データベースというべきMEDLINEとのリンクを行った。ZSは2002年の春からMEDLINEへの登載が決まり、アクセスは飛躍的に伸びた。図はJ-STAGEでの公開直後とMEDLINEへの登載後、二度アクセスが集中するということを明らかにしたデータである。J-STAGEのサービスのひとつである「新着案内」が、最初の山を作っているのではという解釈もある。また、電子ジャーナル閲覧、検索に関して、現在、二次情報データベースが果たしている役割がいかに重要なものかをも示してもいる。電子ジャーナルのアクセスログは、その雑誌がどれくらいアクセスされているかがわかるだけではなく、また購読者行動

の解析にも使われ、電子ジャーナル提供時の重要なデータとなる。さて、J-STAGE から毎月送られてくるデータは、それぞれの論文に対して国内、国外に分けてのアクセス数が示されている。今回の解析には生のデータをご提供頂いた。様々な問題もあるだろうが生のデータこそもっとも意味を持つものである。同時に解析に際しては、データの意味するものを正確に読みとれる熟練した研究者または企業の手を借りる必要があろう。またここにはISI社のIFとは異なる指標をも窺い知ることができる。つまり冊子を閲覧するという行動の数値化の可能性である。冊子であれ、電子であれ、情報が引用されること自体の重要性もさることながら、それを読む、見るということに本来の意義がある。アクセスログ解析が学術誌のある指標になる日が来るのだろうか。イギリスでは*Counter Projectが立ち上がり、久しいが、学術誌を刊行するものとしては、今までにない環境の中、学術誌電子ジャーナルを出版するということの意味さえおおいに考えねばならない時が到来している。

＊Counter project http://www.projectcounter.org/



＊「電子雑誌に掲載された論文へのアクセス状況ーログデータに基づく予備的分析」 日本図書館情報学会
2003年発表パワーポイントからの引用

UniBio Pressの目指すもの

学協会にとって、いわば顔ともいうべきものが学会誌である。日本の研究者の研究レベルの高さはいうまでもない。会員の中だけでその学術情報を提供するだけではなく、それは世界へ向けて発信されるべきものである。趨勢が冊子から電子ジャーナルへと移行しつつある今、J-STAGEはその強力な支援システムである。もちろん学会には学会誌を世界へ広めたいという意識は当初から存在した。それは国の方針ともあいまって、科学研究費の支援により、日本の学術誌は支えられ、育てられてきた。しかし学会には学術誌を販売するという意識はなかなか生まれなかった。販売するなら世界規模の商業出版社という考え方もあり、商業出版社にその販売を委託した学会もある。それはひとつの選択肢である。しかし、商業出版社は、利潤を追求する存在であり、国内はもとより、欧米でも、ジャーナルの高騰を招き、深刻な購入タイトル数の減少を図書館にもたらした。その中で、米国で始まったのが、学術情報流通を研究者の手にもどし、より正しい方向に戻そうという運動、つまりSPARCであった。それはわが国では冒頭に述べた国立情報学研究所の推進する学術流通変革事業という形をとることとなった。UniBio Pressは自らの学術誌を適正な利益の範囲で図書館に販売することで、学協会の自立を目指し、同時に日本における学術情報流通が図書館、研究者、学協会の中で、本来の姿で存在していくことを目指している。

日本の学術団体は電子ジャーナルをどう出版するのか

科学研究費補助や、J-STAGEは、わが国の学協会にとって、どれほどの支援となっているかはいうまでもない。しかし、未来永劫、それを享受し続けることは、可能なのだろうか。昨年来、欧米ではオープンアクセスが声高に叫ばれている。しかしオープンアクセスは、ひとつのビジネスモデルなのである。常に著者が、つまり研究者側が出版費を持ち続けるというモデルである。電子ジャーナルという存在により、学術情報の伝達そのものが変革したことで、電子ジャーナルビジネスモデルへの模索が世界ではじまっている。欧米諸国、団体の対応は目を瞠るべく速い。6月7日、ElsevierがOpen Access self archivingを認めるという記事が、InfotodayWEB版に掲載された。

http://www.infotoday.com/newsbreaks/nb040607-2.shtml

「self archiving」つまり、個人WEB、機関デポジトリへの論文登載を認めるということである。本来の学術情報の担い手である研究者は、この動向にどう対応するのだろうか。そして、わが国の学術誌刊行に携わる人々、研究者は自らの学問分野を守るために何を選択するのだろうか。UniBio Pressは、日本の学術電子ジャーナルのあり方のひとつとして存在していきたい。同時に、日本の学協会が自らの存在を再認識する場でもありたい。そして今後、さらに多くの生物系ジャーナルの参加を心から願うものである。最後になったが、このような自主的パッケージを組めたことは、J-STAGEの方々のご尽力とお力添えによるものである。この場を借りて、あらためて御礼を申しあげたい。

登載誌が増えました

2004年5月末現在、J-STAGEに登載されている資料は、256誌（ジャーナル148誌、予稿集・要旨集69誌、報告書5誌、JST報告書34誌）です。J-STAGE NEWS No.8以降、新たに登載されたものは次頁のとおりです。

	誌　名	発　行　機　関　名（登載日）
ジャーナル	Journal of Atherosclerosis and Thrombosis	日本動脈硬化学会（10/31）
	バイオフィリア リハビリテーション研究	バイオフィリア リハビリテーション学会（10/31）
	Anthropological Science	日本人類学会（11/19）
	Anthropological Science (Japanese Series)	日本人類学会（11/19）
	関西造船協会論文集	関西造船協会（12/19）
	Journal of Pesticide Science	日本農薬学会（1/21）
	Journal of Computer Aided Diagnosis of Medical Images	コンピュータ支援画像診断学会（1/21）
	実験社会心理学研究	日本グループ・ダイナミックス学会（2/17）
	Journal of the Human-Environment System	人間-生活環境系学会（2/27）
	The Journal of Poultry Science	日本家禽学会（2/27）
	水文・水資源学会誌	水文・水資源学会（2/27）
	パーソナリティ研究	日本パーソナリティ心理学会（2/27）
	バイオメカニズム学会誌	バイオメカニズム学会（2/27）
	Funkcialaj Ekvacioj	日本数学会函数方程式論分科会（3/31）
	Journal of Mineralogical and Petrological Sciences	日本岩石鉱物鉱床学会・日本鉱物学会（3/31）
	電気学会論文誌B（電力・エネルギー部門誌）	電気学会（3/31）
	電気学会論文誌C（電子・情報・システム部門誌）	電気学会（3/31）
	電気学会論文誌D（産業応用部門誌）	電気学会（3/31）
	農業気象	日本農業気象学会（3/31）
	非破壊検査	日本非破壊検査協会（3/31）
	IEICE Electronics Express	電子情報通信学会（4/10）
	The Tohoku Journal of Experimental Medicine	東北ジャーナル刊行会（4/19）
	情報メディア研究	情報メディア学会（4/27）
	日本補完代替医療学会誌	日本補完代替医療学会（4/27）
	Plant Production Science	日本作物学会（4/28）
	整形外科と災害外科	西日本整形災害外科学会（4/28）
	日本作物学会紀事	日本作物学会（4/28）
	Journal of Advanced Concrete Technology	日本コンクリート工学協会（5/14）
	Proceedings of the Japan Academy, Series B	日本学士院（5/19）
	Journal of the Japan Petroleum Institute	社団法人石油学会（5/25）
予稿集・要旨集	日本ソフトウェア科学会大会講演論文集	日本ソフトウェア科学会（10/28）
	日本解剖学会 総会・全国学術集会 抄録号	日本解剖学会（10/30）
	日本セラミックス協会　年会・秋季シンポジウム 講演予稿集	日本セラミックス協会（10/30）
	日本印刷学会　研究発表会　要旨集	日本印刷学会（11/5）
	マトリックス研究会記念大会	マトリックス研究会（11/13）
	日本人間工学会大会講演集	日本人間工学会（11/18）
	日本原子力学会 年会・大会予稿集	日本原子力学会（12/17）
	九州理学療法士・作業療法士合同学会誌	九州理学療法士・作業療法士合同協会（1/8）
	日本薬物動態学会年会講演要旨集	日本薬物動態学会（1/8）
	日本地球化学会年会要旨集	日本地球化学会（1/8）
	高分子学会予稿集	社団法人　高分子学会（1/8）
	ポリマー材料フォーラム講演要旨集	社団法人　高分子学会（1/8）
	バイオフィリア　リハビリテーション学会研究大会予稿集	バイオフィリアリハビリテーション学会（1/8）
	日本蚕糸学会 学術講演会 講演要旨集	日本蚕糸学会（2/10）
	九州歯科学会総会抄録プログラム	九州歯科学会（2/20）
	日本植物生理学会年会およびシンポジウム　講演要旨集	日本植物生理学会（2/24）
	溶接学会全国大会講演概要	溶接学会（3/8）
	反応と合成の進歩シンポジウム 発表要旨概要	日本薬学会化学系薬学部会（3/10）
	日本理学療法学術大会	日本理学療法士協会（3/19）
	大阪歯科学会例会抄録	大阪歯科学会（4/1）
	研究発表会要旨集	水文・水資源学会（4/20）
	日本ヒトプロテオーム学会大会要旨集	日本ヒトプロテオーム機構（5/7）
JST報告書	Calcium Oscillations: Molecular Mechanisms and Medical Implications of an Extraordinarily Versatile Cell Signal -Joint Symposium of Karolinska Institutet and Japan Science and Technology Agency	科学技術振興機構（4/9）
	大学等を核にした地域における新産業創出拠点の整備のあり方と今後の方向	科学技術振興機構（5/27）

■編集後記■

♪学協会の発展をJ-STAGEがお手伝いできることを喜びとしています。皆様の声をJ-STAGEに反映するなど研究者の架け橋となるべくこれからも努めさせて頂きます（ほ）

♪検索・閲覧利用者、情報発信者（学協会）それぞれにとって魅力溢れる電子ジャーナルサイトを目指してJ-STAGEの進化に努めてまいりますので、今後ともご協力よろしくお願いします（ま）

★J-STAGEおよびJ-STAGEニュースに関するご意見・ご質問をお待ちしております。
JST知的資産集積部　電子ジャーナル部門（contact@jstage.jst.go.jp）

J-STAGEニュース　No.10　2004年7月1日

http://www.jstage.jst.go.jp

編　集　独立行政法人　科学技術振興機構
知的資産集積部　電子ジャーナル部門
発行人　知的資産集積部長　曽根　由紀子
住所　〒102-0081　東京都千代田区四番町5-3　サイエンスプラザ
電話　03-5214-8455（ダイヤルイン）
E-MAIL　contact@jstage.jst.go.jp

J-STAGE News No.10 正誤表

【訂正】２ページ「日本化学会で J-STAGE を出展」記事中、１行目
（誤）『2003 年 3 月 26 日(金)～』
（正）『2004 年 3 月 26 日(金)～』